

緒方 瞳子

OGATA, Tohko

自己を編み綴る

Spelling out myself by knitting

世界各地の文化に見られる装飾性豊かでユニークな被り物は機能性を超えた文化的な装置でもある。私は被り物が持つ象徴的な意味について興味を持ちながら自らのための被り物を制作し、頭部に装着し、その姿を撮影してきた。本研究では、一本の糸を編むという行為、編み綴ったものを身にまとうこと、それをセルフポートレートにすることを通じて、自己の内面的な世界を探求することを研究目的とする。

私の体内に多様な感情や葛藤が複雑に絡みあいながら存在することを5つのテーマによる作品《執着と諦観の共存》(図1)、《偏愛と排他的対立》(図2)、《野放図ともよぶべき過激性》(図3)、《稚拙と未成熟》(図4)、《暗い葛藤》(図5)で表した。これらのテーマはいずれも私の中に矛盾しながらも同時に存在するものである。

《執着と諦観の共存》は、私の中に同時に存在する執着心と諦観を表したものである。いつまでも諦めきれずにしつこく女々しい一方で、ある時は一瞬にして気持ちが醒めてしまう感情が私の中に共存する。羊毛を手紡ぎした糸を用いることで技法でもしつこさを表現し、ラバーバンドを規則的に組むことで感情が行き止まりになることを表した。

《偏愛と排他的対立》では、ごく近い人々だけに関心と愛を注ぎそれ以外の者に対して無関心で攻撃的でさえある私を表した。ここでは私が最も信頼している制作技法である編技法を用いながらも繊維素材ではない真鍮ワイヤーを鎖編み技法で荆棘の冠のような被り物を制作することで、無機質さ、攻撃性、排他性を強調した。

《野放図ともよぶべき過激性》では、だらしなさとストイックさの両方が自由気ままに存在するカオスのような私の内面、極端で時には感情のコントロールができずに過激な行動に及んでしまう私を激しい色彩と無秩序に増殖していくような編みで表した。

《稚拙と未成熟》は、家族の中で娘であり妹である位置付けとその役割から成長できずに幼さと甘さを引きずり続けて今に至る私そのものである。繊細なレースで幼さを、柔らかなラビットファーで、甘さを表した。

《暗い葛藤》は、私の心の奥底にある暗闇の世界であ

る。そこで独り、不器用にもがき苦しみ目に見えないものと戦い続ける自己の感情を、編み地をさらに組み部分的にチュールで隠すことで表した。その暗闇の中の自己の姿は未知の存在としての私であることを強調した。

以上のような自己の多様な5つの内面を象徴する被り物を制作した。これらは私の内面の感情を色と素材と技法で具現化した私の分身でもある。これらを頭部に装着することで物質化された自己の心情を再確認し、被写体となり自己を第三者の視線でとらえることで自己探求を行った。

私はなぜ、頭部に的を絞って制作し続けてきたのだろうか。なぜ、からだ全体ではなく頭部、そして編むという行為に執着したのだろうか。

頭部一点のみの装飾として被り物を編み綴る行為を集中させることで自己と鑑賞者にイメージーションを働かせる余地を残したいと考えたからだ。様々な文化や宗教において、頭部とは人の体の中で最も高貴な部分とされる。そして顔は化粧の歴史からも明らかなように施される装飾も豊かである。また世界の様々な国々の豪華絢爛な王冠や兜、異常に盛り上げられたマリー・アントワネットの髪型、複雑な形態に結び上げられ簪などで飾られた日本の遊女の鬘等、頭部には自由度の高い造形が可能である。私はあえて身体の中だけでもこのような特徴的な部位を選び、私の内面から表出する負の感情を頭部に集中させて執拗に編み綴り装飾としたが、負の感情をそのまま編み綴ることができたのだろうか。指導教員からテーマ(言葉)と作品表現が結びついていないという意見を得たが、美しく作品としてまとめようとする理性が働きありのままの姿を露出できなかったのかもしれない。あるいは私の「過激」「執着」等の言葉に対する価値観が本来の意味とかけ離れていたのか。しかしながら、本研究により現時点の自己を探求し「私が何者であるのか」を確認することができた。そこには作家として、未だ「稚拙で未成熟」な自己、繊維造形とコンテンポラリーアートの狭間で揺れている自己、が表出されていたことを痛感した。

本研究を通じて探究した自分自身を知りたいという欲求はまだ満たされていないが、現時点の自己についての検



図1: 執着と諦観の共存 / Persistense and resignation in unison / 50×50×45cm



図3: 野放図ともよぶべき過激性 / Unbridled extremism / 40×50×55cm



図2: 偏愛と排他的対立 / A conflict between favouritism and exclusivity / 70×30×30cm



図4: 稚拙と未成熟 / Naivety and immaturity / 23×25×30cm

素材: 羊毛、ラバーバンド、真鍮ワイヤー、ナイロン、レーヨン、絹、ラビットファー、綿、ナイロンチュール
Wool, rubberband, brass wire, nylon, rayon, silk, rabbit fur, cotton, nylon tulle

証ができたと思う。今後も制作活動を継続することにより自己の探求を行っていききたい。また、ひたすら一本の糸を編み綴る行為は、自問自答を繰り返す行為でもあり、私の自己探求において欠かせないことが明白となった。一人の自分のなかに様々な自分があり、場面によってそれらを使い分けている。生活の中では不本意な行いをしなければならぬときがあり、本心は心の奥に仕舞われている。それらが表出するきっかけとして編み綴る行為というものがある。私にとって制作することは、自己を編み綴ることであり、生きていることの証を実感することでもあるのだ。



図5: 暗い葛藤 / Dark discord / 50×60×35cm

仲澤 玲奈

NAKAZAWA, Reina

半綜統によるもじり織の技法研究

Research of leno weave techniques using skeleton heald

はじめに

もじり織（縦織）とは絡み織・搦織（からみおり）とも呼ばれ、隣接する経糸が位置を変え互いにもじり合わされて緯糸と交差する組織のことである。もじり織には糸のもじり方によって大きく紗・絹・羅の三種類の組織があり、中でも羅は最も高度な製織技術を必要とする組織である。

私ともじり織に関心を持つきっかけとなったのは、国立近代美術館工芸館にて2012年2月7日—4月15日にかけて開催された『「織」を極める 人間国宝 北村武資』展を観たことだった。着物地を中心に、技巧を凝らした素晴らしい織物が数多く展示されており、その中で最も衝撃を受けたのが、「透文羅」と呼ばれる、羅の技法を駆使して織られた北村氏独自の織物だった。細く滑らかな絹糸を使用して織られたこの布は、ショーケースの中のわずかな送風にも揺らめくほど薄く軽やかで、今にもほぐれてしまいそうな織細さに強い感銘を受けた。大学でテキスタイルを学び始め、布そのものに意識して目を向けるようになったばかりの私にとって、初めて心の底から「美しい」と感じた織物であった。以来、私は薄手の布や透かし空間のある布に関心を持つようになったと自覚している。

もじり織の歴史について、特に優れた遺品が残るアンデス・中国・日本に焦点を当てて調査を行なったが、どの地域にも共通して羅の技術が盛行していたのに対し、紗や絹はあまり織られていなかったようである。これはどの地域・時代でも、羅が紗・絹に比べより高度な技術と時間を必要としたことや、外観的に単調な紗・絹地より、複雑かつ耐久性もある羅地に価値が見出されていたためと考えられる。また一方で、羅の技術が先に考案され、その後に紗の技術が考案されたのではないかという説もある。

このような調査結果と、2年間という限られた時間の中での研究ということ踏まえた上で、羅に劣らない美しい透かし空間をもつ織物の製織が、より手軽に取り組める紗・絹の技法で可能にならないだろうかということが問題提起された。そこで本研究において、特に紗・絹に着目し、その製織技法と表現の可能性を探ることとした。

研究と制作について

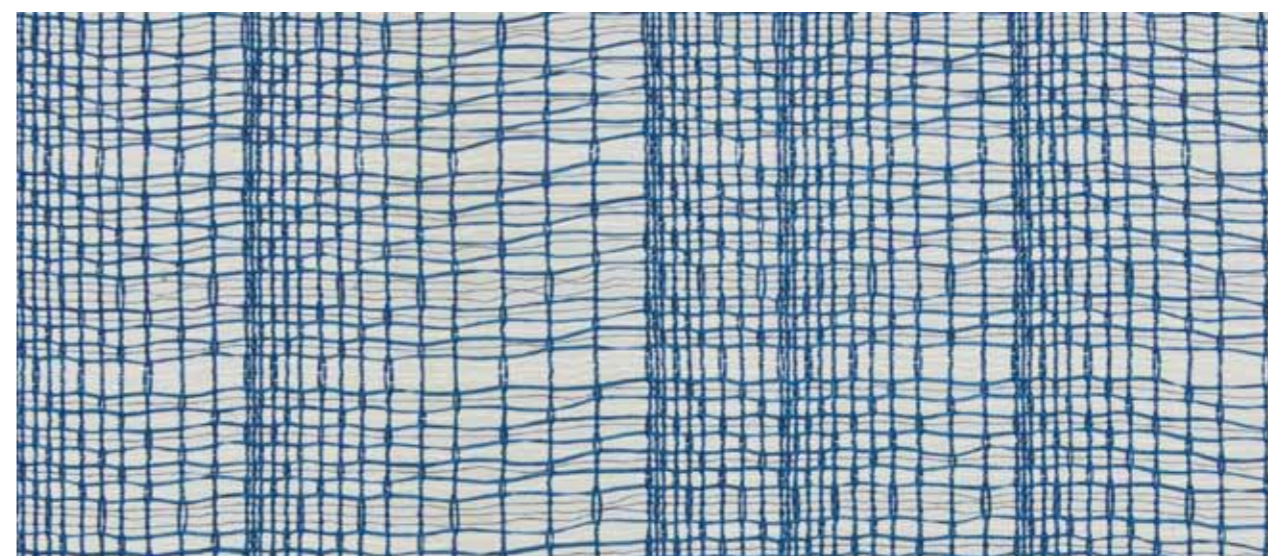
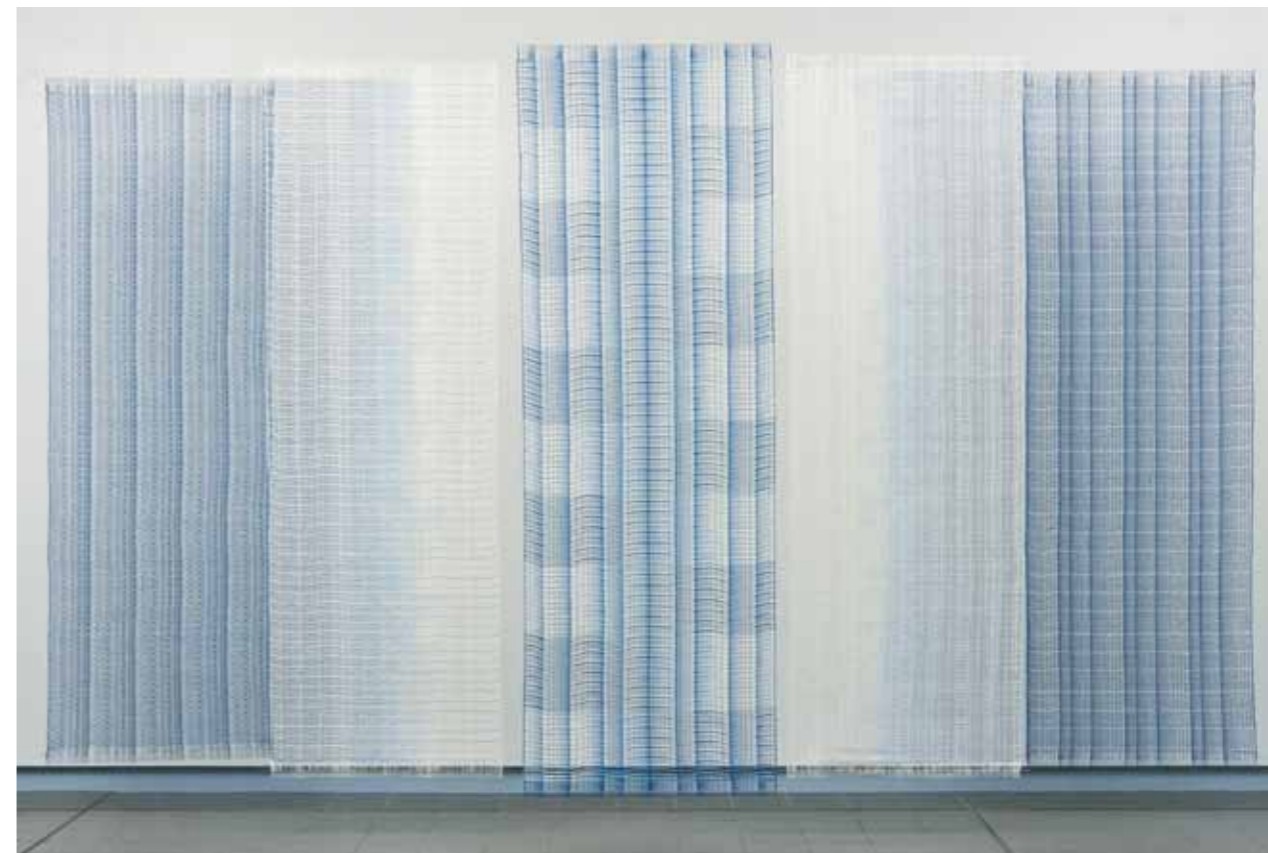
研究の対象として、半綜統を用いたもじり織の製織技法を取り上げた。半綜統とは振綜（ふるえ）ともいい、通常の綜統の半分の長さで作られた特殊な綜統のことである。通常の綜統と半綜統を併用することで、手で経糸を一本ずつもじらせるよりも速くかつ容易にもじり織を織ることができるのである。その半綜統の作り方を始め、織機へのセッティング方法、組織の展開、素材の検討などを行なった。

研究を重ねる中で気付いたのは、もじり方によって緯糸に歪んだ動きが生まれるということだった。織物は経・緯糸が水平・垂直に交わり構成されるのが基本であるが、もじり織は経糸をもじらせるという点で、既にこの基本からは逸脱していると考え。そこへさらに緯糸も歪むようになったことで、織物とは思えないような複雑な表情の布が織れるようになったのである。その緯糸の歪んだ表情と、もじること生まれる糸と糸の間の織細な透かし空間に魅力を感じ、修了制作ではその魅力を詰め込んだ集大成として、5枚の変わり絹の布を発表することとした。

作品を並べたとき、私は布全体から自然の美しい情景を联想した。作品タイトルの《蒼涼（そうそう）》とは、おおおおと草木などの茂る様子を表わした「蒼々」と、水の流れそそぐ、さらさらという音を表わした「涼々」を組み合わせた造語である。あえて抽象的なニュアンスを残すことで、鑑賞者それぞれが思い浮かべる自然の情景と重ね合わせ、癒しや感動を与える作品であってほしいという願いも込めた。

おわりに

私が半綜統によるもじり織を研究して感じたのは、想像以上の自由さと可能性である。半綜統を取り付けた経糸は組織次第でもじり以外の動かし方もでき、その点で織物設計をする際の考え方は通常の場合とさほど変わらないと感じた。しかし実際の糸の動きは非常に複雑で、織ってみるまでどのような布が織り上がるかわからず、未だに机上での具体的なデザイン計画ができないほどである。セッティングでのいくつかの決まり事があるとはいえ、それが苦痛とならないほど、興味深い表情の布を数多く生み出すことのできる、



蒼涼 / The breath of the earth
綿糸、紙糸 / Cotton and paper yarn / 225 × 75 cm (5点)

探究心の尽きない技法であると思う。

本研究は作品をつくるための技術への関心が出発点となったが、美術大学においてそのような研究を進めることに対する抵抗感に悩まされることがあった。技術からのものづくりは表面的には美しくとも中身が無く、芸術作品の域に到達するのは非常に困難であるという偏見が自分の中にあっただからだ。しかしこの2年間を通して、技術の研究は芸術性

を持つ制作には欠かせないということを私は経験した。作品として芸術的な価値のあるものにするには、自己の精神と向き合うことや、様々な知識が必要となってくる。それらを合わせて形あるものにするとき、質の高い技術が支えとなることでより優れた表現が可能となる。精神、知識、そして技術のどれにも偏り過ぎず、全てが調和したときに、芸術作品というものが生まれるのではないだろうか。